

儒学論集

儒学文化 第6号

巻頭言

儒学文化について考えよう

学校法人昌平黉 理事長

儒学文化研究所 所長

田久孝翁

孔子の教えを基本とする儒学思想的文化は、既に 2550 有余年の歳月を経て今日に至るも何ら変革の兆しもないと云うことは正に真理そのものであるからです。

2550 有余年に及ぶ歴史の流れは、古代から中世、近代と幾多の変遷を経て、今日の文明社会を築いてきたのでありますが、そのこと自体我々現代人は何と理解しているのでしょうか。近代文明に謳歌する余り『論語』等は古代文明の遺物として忘れ去られて来たきらいがあります。

そのような世相の中で本学としては孔子の教え、儒学文化の精神を建学の理念として人造り（指導教育）のモットーに掲げ、「行義以達其道」義の伴わないものは如何に高邁なる理想と云えどもその目的を達することは出来ないと諭しているのであります。これを建学の精神として今日的課題に取り組んできた学校法人昌平黉は、その名の通り「昌平」日々に平らかにして昌（盛）と云うことは、そのまま世界的平和を意味することであり、その目的に向かって精進する、「治にありて乱を思う」の譬えの通り、今こそ「平生人護」人を護ることは我々文化人類に与えられた責任と義務であります。その意味に於いても現代社会、世界平和の在り方について考える。そこに初めて「儒学文化」の価値観が求められるのではないのでしょうか。

2550 有余年の昔に遡り、「有教無類」教育に勝るものは無いと云う正に孔子ならではの格言を、今日的な社会機構の中に再現して是れに勝る言葉があるのでしょうか。にもかかわらず、これを蔑ろにする現代文明社会の背景にこそ憂いを残す数々の悲劇が想起されて行く。是れで文明社会と云えるのでしょうか。そこには文化と文明の違いが如実に現れてくる。即ち文明の衝突であると云われるテロと報復の連鎖反応であります。我が国に於いても幼児虐待防止法等罷り通る世代であるが、嘗て万物の霊長とも云われた動物本来の愛情などは何処へやら、これで文化や文明人と云えるだろうか。そこにも教育本来の姿に立ち返り、人間として真の動物愛を取り戻すことを目的とした教育を考えなければなりません。そこで倫理哲学についても一度教育の分野に於いて考える必要があります。例えば人の道とは徳とは、即ち「道徳」の世界について考える。政治、経済、教育、産業など幅広い分野に於いて共通の真理を考える時に初めて「義」の何たるかが求められることとなります。「行

義以達其道」と謂う本覺建学以来の大精神も正にそこにあるのです。即ち謙讓の美德、道、徳、功、力を極めることが教育であります。

現代的文明社会の背景にあるものは、物で栄えて心で滅ぶ、ような致命的環境を如何にせん。基本的人権さえも守られない一国の国益と利権が最優先する覇権主義社会が優先することでは、テロと報復が繰り返される乱世を放任することは許されません。孔子生誕以来 2550 有余年幾度か繰り返された乱世の果てに築き上げられてきた今日の文明社会を無に帰してはなりません。今こそ儒学文化の原点に還って「仁義礼知」の精神に基づく道德心の涵養こそが求められているのではないのでしょうか。これを年代的に分析すれば宗教戦争の徒かギリシャ、ローマ文明が支配したサラセン王国、イスラム教、仏教、キリスト教等宗教界によって支配される文明社会の延長線にイデオロギー的、非倫理的宗教界特有の自己顕示的思想の表れとして表現されたのがテロであり、報復戦争と云う悲劇を繰り返す現代的世相を思うとき、儒学は 25 世紀に及んで不変の真理を貫く哲学的思想であり、是れを学び是れを知ることこそ現代社会、世界の平和に貢献する唯一の道ではないのでしょうか。